

明治

41-11



臨時増刊 尾瀬沼

44

みづゑ 第四十四要目

尾瀬スケッチ(水彩畫石版).....	大下 藤次郎
湖畔の雨(水彩畫石版).....	八 木 定 裕
白樺(水彩畫石版).....	赤 城 泰 舒
自然の庭(水彩畫石版).....	森 島 直 藏
いでたち(線畫木版).....	赤 城 泰 舒
尾瀬沼.....	大下 藤次郎
尾瀬日記.....	森 島 直 藏
寄書.....近事.....紹介其他	

前號要目

○深山の秋(水彩畫原色版).....	大下 藤次郎 ○イースト氏
(寫生談).....「樹木、草」.....	石川 欽一郎 ○南歐の秋(水彩
畫石版).....河合新藏 ○眞正の繪.....芙蓉生 ○多摩の眺	
望(水彩畫寫眞版).....	大下 藤次郎 ○色彩應用論(自然界
の現象).....	榕村 主人 ○文部省展覽會の水彩畫.....大下
藤次郎 ○ダリヤ(水彩畫石版).....	登美子 ○長野繪畫展覽
會を見る.....	T O 生 ○秋のたび.....汀 鷗 ○關西美術展覽
會.....	戸張 孤雁 ○其他展覽會の繪畫.....ボンチ繪の勢力
.....寄書.....問答.....	寫眞版數葉



みづゑ

第四十四

明治四十一年十一月十八日（臨時増刊）

尾瀬沼

大下 藤次郎

今より十四年前、雜誌太陽の第一卷一號に、利根水源探險記があつた、一行十餘人で利根を溯り、藤原村より溪流を歩し、大困難をして一大平原の上に、出た、それは尾瀬ヶ原で、遙かに一湖沼を見たが、それが尾瀬沼である、そして其湖畔に小屋があつて、岩代と上野との住人が物貨の交易場に宛てられてある、會津檜枝岐よりするも、上州戸倉よりするも、何れも五里程あつて、無人の境、風光極めて佳絶であると誌してある。

私はこの記事を讀んだ時より、その尾瀬沼を是非探つて見たいと思つた、そして會津方面の人に逢ふ毎に、地勢を問ひ、順路を問ふた、そして其答ふる處は、地圖の上では國道があるが、實際は僅かに細徑の通ずるのみで、それすら夏は人よりも丈高き草に掩はれ、冬は十餘尺の深雪に其道の所在さへ知れぬ、そして山道十里の間人家もなく、一夏僅かに十數人の往來ある程故、トテモ都の人の行き得べき處でなく、よし往つた處で野宿をせねばならぬと、誰れからも粗ぼ同じ様な答を得た、然るに雜誌山岳第一年第一號に、武田久吉氏の尾瀬紀行がある、これによつて見ると、野宿といふても小屋があるらしく、戸倉から準備さへしてゆけば、大なる不便なしに滞留することも出來そうに思はれた。次に中村文學士の「旅ころも」を讀むと、同氏は友人と共にこの街道を通つて檜枝岐へゆかれたのである、その記事で見ると、湖沼は大したことないが矢張景色は立派なやうである。

歐米の畫家はよくテント旅行をやる、そして研究のために人跡無人の境にゆくことは珍らしくない、吾國ではあまりこのやうな事はしない、數年前、吉田中川兩氏が日光赤薙山の炭焼小屋に泊まつて寫生された

事があるが、東京から食物や寢道具迄も携帯して往つた譯ではない、私達の今度の旅は兎に角前例なき大仕掛なものであるといへやう。

私は湖水が好きだ、去年日本アルプスの溪谷上高地迄往つたのも、實は宮川の池を見たいからであつた。その前年は、會津磐梯山の裏に秋元、檜原等の湖水をたづねた、地理學者のほかその名さへ知らぬ尾瀬沼は、畫家未到の地で、さぞかし景色のよい處であらうと思ふ、今年はこの方面に遠征を試みて見やうと考へた。

まづ、群馬縣利根郡片品村役場に宛て、照會狀を發した、その返事に、尾瀬には小屋がある、修繕したら雨露を凌ぐことが出來やう、戸倉にては米鹽の用意は出來る、人夫は得られるといふのであつた。更に前橋なる根岸文吉氏に手紙を出す、根岸氏は丸山晚霞君の知人で、植物採集のため時々尾瀬地方へゆくとの事である、根岸氏からは早速返事があつて、丁度高山植物をとりにゆくから、歸つたら報告するとの事、かくて七月初旬根岸氏は來られた、その話に、尾瀬にゆく道は極めて惡路で、途中まだ雪があつた、小屋は檜の突出しに大林區署で作つた人夫小屋があつて、これは役に立つつもりである、食物は戸倉にもあるけれど、米はトテモ食へぬ、沼田から送らせて置く方がよい、人夫は平生なら一日一圓位ひで幾人でも得られるが、七月は丁度養蠶の多忙な時であるから、まづ倍賃金も拂はねば六づかしい、沼田の宿屋は惠比須屋、追貝では淀屋、戸倉では玉城屋、何れも一泊五十錢位ひとの話なされた、これで要領を得た、早速同行者を募つた處、第一に森島君が賛同し、夫から赤城君、八木君と同勢四人になつた、出發は七月十二日と極めて、沼田の宿屋へ爲換を送つて、戸倉迄上等白米八升と醬油一瓶を送らせた、そして吾等は旅行準備にかゝつた。

食料として携帯したものは、ハム四斤、鰹節一本、砂糖、氷砂糖、佃煮、梅干、煎り豆、菓子、辛子漬、鳥貝、福神漬の類、藥は寶丹、ゼム、マラリヤ豫防のキニーネ、バンソー膏、固腸丸、ハブ草エキスの類、日用品としては提灯、マツチ、蠟燭、小刀、石鹼、インキ、紙、筆、油紙、細引、懷爐の類、衣類は冬シヤツ、ズボン下、手袋、襟卷、腹卷、眞綿、蚊防具、毛布、枕、外套、草鞋、掛足袋の掛がへ等を重なるものとし、他は通常旅行に要する品々を用意した。

出發五六日前に、同行者を集めて尾瀨沼會を開いた、そして携帯すべきものゝ分擔方法、並びに旅行中の種々なる注意をした、その注意の重なるものは、食物、特に生水を飲まぬこと、列を離れて單獨行爲をとらぬこと等である。

豫定通り十二日朝出發、同夜沼田へ一泊、十三日は追貝へ、十四日に漸く戸倉へ着いた、爰にて携へし食料のほか、蕎麥粉二升を用意し、十五日尾瀨湖畔の小屋に到達した、山小屋は先年信州地方で見たものは中々完美したものであつたが、尾瀨の小屋は如何にも憐れなもので、少しく用意の不充分であつたのを知つた。我等の宿營地は海拔四千餘尺の地で、標高七千八百餘尺といはるゝ燧ヶ岳の麓にある、周廻三里の山湖、これを尾瀨沼といひ、宿舍を去ること僅に二丁、風光極めて明媚極めて幽靜である。

こゝに止まること五夜、その間出来るだけスケッチをした、あまりに材料の多いので、落ついて二三枚の繪を造つて満足して歸るとは出来ぬ、よいと思ふ處は一つ残らず畫いてゆきたい、一日に七八枚も寫生した時もある、高原に咲いてゐる花ばかり集めて畫いても、一月や二月の畫材に苦しむことはない。

六日目にこゝを去つたが、此上留まるべき時日と用意のないのが如何にも残念に思はれた、私は出来ることなら此地に完全な小屋を作つて年々來て研究したい、そして世の風景畫家に此地を紹介したいと思ふ、旅行中の有様は、次項尾瀨日記に就いて承知せられたい。

山深くして路なく交通便のよからざるが故に、人の行くこと稀に、其の名世に現はれず、千百の珍花爛熳たる自然の大公園も、旅行家の足跡を印せるもの殆んどなく、信飛越境上、天空に峙ち雲表に聳ゆる高岳を跋涉し、自ら明治の小角を以て任ずる人も、未だ尾瀨の名を耳にせずと云ふに至りては吾人尾瀨の爲に深く悲む所なり。(武田氏尾瀨紀行の一節)

尾瀨日記

森島直藏

七月十二日 晴

『尾瀨沼』、『尾瀨ヶ原』、これ等が話題になつて、夜をそく迄話し合つたり、地圖を展げたりしたのは、ツイ二三ヶ月前だつた。モウ今日は其出發の日だ。

同行者は大下先生、赤城、八木兩君と、僕都合四人連れ。

午前五時半に先生のとこへ集る筈なのに、赤城君と八木君はやつて來ない、ドウしたらうと二三度さがしに行つたが見えない、心配しながら、先生と二人で先きへ『目白ステーション』迄出かけた。

兩君は汽車の時間にやつと間に合つた、然し大急ぎで馳けて來たので八木君はモウ足が痛いと言ふ。痛いの無理はない二人とも五六貫も有らうと思ふ荷物を身體に着けて居る、其姿は實に異觀だ。こゝ迄來る時には僕ばかりコンナ重いかと内々心細かつたが、此の二人を見て幾分か慰められた。それも其筈何しろ『尾瀨ヶ原』で世帶を持たうと云ふのだから。

前日眞夜中に去る處から電報が來て、その用事を差支なく運ぶため、三時頃から起きて、出發前に長い／＼手紙を三四本書いた。さて時刻になつてやつて來たのは直(森島)さんばかり、停車場で待つことにして家を出たが、背中荷物は馬鹿に重い、門口で捨て、仕舞ひたくなつた。

發車の二三分前に、ヤット泰(赤城)さんと定(八木)さんが汗みどろになつて駈けつけた、今朝寢過して大に慌てたそう、そしてモウ汽車は間に合はぬと覺悟してゐたそう。(鷗)

汽車は『目白』驛員の御蔭で『赤羽驛』で一寸まごついた許り、マア／＼無事で、車中では八木君の『パイナップル』の御馳走も出る、『秩父』の山々も賞する、『熊谷』土手も眺める、十時過ぎにば『前橋』驛に着いて直に鐵道馬車に乗り換へた。馬車は云ふ迄もなく『マツチ』の箱の様な小さなもの、先生などは頭がつかへそう、或はつかへるかも知れぬ。八木君は乗換の時一人残つて居た爲、車臺が動き出したので入口へ頭をぶつけるやら大騒ぎ。

『澁川』に近づくに従つて景色は面白くなつて來たが、何だか空模様があやしくなつて、遠くでゴロ／＼鳴つて來た。『阪東橋』を渡る頃、『榛名』の山はモウ雲足が切れそうだが、河の對岸——ヒヨロ高イ松並木も山麓森林も早や雲の下、夕立の景色で有る、豆の様に見ゆる人が駈け出す哩と見てゐたら、既に雨は車の窓を打つ。

『榛名』には日が當つてゐる。

『澁川』からは別に馬車を備ふて『沼田』迄行かねばならぬ。茶店で聞くと今出たとこだと云ふ、馬車屋へ行つてかけ合つたがマア時間迄モウ一時間半も待つてくれとぬかす、困つたものだと、元の茶店へ歸らふとする後からモシ／＼と呼ぶ者が有る、馬車なら私の方に御座いますと云ふので大喜び、早速ソレへ乗

つた。

今度の馬車は四人乗りで頗るハイカラなものだ、四人は此ハイカラ馬車の中で辨當を食ふ。日は容赦なく照る、雲は一つもない、紫の山は紫の山に重なつて居る、トンネルを二ッ越して、雪の下が一面に咲いてる中に立つ巨樹の側を走つて三時頃『沼田』の恵比須屋に着した。

『前橋』と『澁川』の間『阪東橋』の邊は中々景色がよい、頗る壯大である。

『澁川』から乗つたのは上等幌馬車式で、前後差向ひ、横から乗るやうになつてゐる、泰さんの喜ぶこと非常で、こんな馬車は生れて初めて乗るといふて大得意であつた。

馬車の中で晝食をやつた、握めし、海苔卷、サンドウィッチ

などが出る、慇むらくは咽喉を濕ふすお茶がない。

『利根』の橋を渡ると二三の料理屋がある、下から餅菓子を盛つた皿を差上てゐる男がある、二階から若い女が手を伸したが届かぬ、終には家根の上まで出て來て恐るゝ皿を受取つてゐた。(鷗)



今は繭買ひの客で宿屋は一ッバイだ、然し前からソウ云つて有つたので所謂「上の家」とよまる事が出来た、こゝは宿屋とは離れてゐるが大きな家で、表の方には下駄の臺が澤山積み上げてある、一行四人は此家を買切りの姿。暫らく休息してスケッチに出かける。

宿の混雑はモツケの幸で、吾等は二階建の大きな家一軒を占領した、二階は三十疊も敷かりそうだ、併し久しく人が住まぬためか、便所に一種の臭氣のあるのには閉口否閉鼻せざるを得なかつた。

歩行はしないが、長時間汽車や馬車で可なり疲れた、定さんはモ一豆が出来た、『水道町』から『目白』迄二十丁程で、この有様では『尾瀬』へ着くころには一度分のお菜位ひはあるだらう(鷗)

暮れ行く『沼田』の町、何となく詩的な感がある。『沼田』は昔眞田氏の居城であつた、今は其の跡もないが……限りなくモク／＼と湧く夕雲が暗く空を覆ひ、連々と起伏する山のみ僅に夕日に照つて火の様な色をなす邊、血の如き眞田氏の熱烈が見える様だ。

夜は繪葉書やら荷物の整理やらで忙がしい。

『沼田』の町は一寸繪になる、町端れから雲むら立つ『赤城』の山を寫した、何處を見ても繪になる、二三日は滯留してもよい處である。

この夜は靜かであつた、隣りに寢てゐた直さんが、夜中に吾輩の夜具を引張るのに困つた。(鷗)

七月十三日 半晴

午前六時半宿を立つ、流石『沼田』は養蠶の町である、家の構造は全く都附近——否『澁川』とてすら既に違つて居る、棟の高い二階造り、僕等の目には珍らしく感じた。

朝は五時出發と宵に姉さんに頼んで置たのであるが、五時頃往つて見ても、まだ本家では戸が閉つてゐる、トン／＼叩いて女共を起し、顔を洗ふや否飯を急がせて、漸く六時過出發した。

銘々の装こそ大ヘンなものである、洋服に脚絆、新しい草鞋がけのお揃ひだが、その所謂洋服なるものが大變だ、中學三年時代の制服もある、紹か何かのイヤに古ボケたものもある、鼠色の麻の如何にも窮屈そうなのもある、かく申某^{それがし}は、上衣こそやゝ物になつて居るが、ツボンと來ては東京市中を歩行けた代物ではない。

人夫がないため荷物は自分で負ふてゆくの、寫生用の七ツ道具のほか、毛布やら防寒具やら、食料やら、日用品やら、數の多いのは一人で六七個もある、犬の吠へるのも無理のな

い體裁である。(鷗)

桑畑の間を行く事半里許り、見晴らし好き所を擇らんで腰を下ろす、下は谷——『片品川』は向ふの山の間から出て、此の谷を走つて遠く西の方へ去り、『上久屋村』が川に沿ふて點々と見ゆる、四方は矢張り山である。

『沼田』の町を離れたばかりでモー荷が重い、肩が痛い、休みませうとの聲が出た、今から休んでは詮方がない、美人に逢ふ迄とか、見晴しのある處迄とか、何とか云ふては一步步々運んだ。『上久屋』で休の聲がかゝつた時は、恰も倒れるやうに皆々草の上に座した。(鷗)

『高平村』迄一里、路至つて平凡であるが、それから今日の難所『栗生峠』にかゝるのである、『栗生峠』は其の名の現はす如く栗が素的にある、栗時分はサジ好い事だらう、ソレは餘計な心配だが何しろ肩が痛い、足が痛い、重い荷物はグ／＼脳天から押へ付ける、汗は出る、日は照る、其の難澁き加減、後から來た郵便屋サンはモク／＼と先きに行く。實に苦しい、他から見られたるもので無いだらうが、本人は一生懸命、水を飲むたり樹蔭で休んだりする事三四回、十二時にやつと峠に達した。十二時ときけば腹がへる、茶腹モ一時だがきつき飲んだ水はモウ汗となつて出てしまつた、峠の上には水一滴だつて有りやしない、先生の主張で一息に『大原新町』迄下りる事にはしたが、サテ歩き出すとこたゑる事甚しい。『新町』では所謂「ちむどん」を喰べた、菓子代りに出した柿の砂糖煮は甘露の味がした、先

夜は繪葉書やら荷物の整理やらで忙がしい。

『沼田』の町は一寸繪になる、町端れから雲むら立つ『赤城』の山を寫した、何處を見ても繪になる、二三日は滯留してもよい處である。

この夜は靜かであつた、隣りに寢てゐた直さんが、夜中に吾輩の夜具を引張るのに困つた。(鷗)

七月十三日 半晴

午前六時半宿を立つ、流石『沼田』は養蠶の町である、家の構造は全く都附近——否『澁川』とてすら既に違つて居る、棟の高い二階造り、僕等の目には珍らしく感じた。

朝は五時出發と宵に姉さんに頼んで置いたのであるが、五時頃往つて見ても、まだ本家では戸が閉つてゐる、トン／＼叩いて女共を起し、顔を洗ふや否飯を急がせて、漸く六時過出發した。

銘々の装こそ大ヘンなものである、洋服に脚絆、新しい草鞋がけのお揃ひだが、その所謂洋服なるものが大變だ、中學三年時代の制服もある、縞か何かのイヤに古ボケたものもある、鼠色の麻の如何にも窮屈そうなのもある、かく申某は、上衣こそやゝ物になつて居るが、ヅボンと來ては東京市中を歩行けた代物ではない。

人夫がないため荷物は自分で負ふてゆくの、寫生用の七ツ道具のほか、毛布やら防寒具やら、食料やら、日用品やら、數の多いのは一人で六七個もある、犬の吠へるのも無理のな

い體裁である。(鷗)

桑畑の間を行く事半里許り、見晴らし好き所を擇らんで腰を下るす、下は谷——『片品川』は向ふの山の間から出て、此の谷を走つて遠く西の方へ去り、『上久屋村』が川に沿ふて點々と見ゆる、四方は矢張り山である。

『沼田』の町を離れたばかりでモ一荷が重い、肩が痛い、休みませうとの聲が出た、今から休んでは詮方がない、美人に逢ふ迄とか、見晴しのある處迄とか、何とか云ふては一步步運んだ。『上久屋』で休の聲がかゝつた時は、恰も倒れるやうに苔々草の上に座した。(鷗)

『高平村』迄一里、路至つて平凡であるが、それから今日の難所『栗生峠』にかゝるのである、『栗生峠』は其の名の現はす如く栗が果的にある、栗時分はサツ好い事だらう、ソレは餘計な心配だが何しろ肩が痛い、足が痛い、重い荷物はゲン／＼腦天から押へ付ける、汗は出る、日は照る、其の難澁さ加減、後から來た郵便屋サンはモウずつと先きに行く。實に苦しい、他から見られたもので無いだらうが、本人は一生懸命、水を飲むだり樹蔭で休んだりする事三四回、十二時にやつと峠に達した。十二時ときけば腹がへる、茶腹モ一時だがさつき飲んだ水はモウ汗となつて出てしまつた、峠の上には水一滴だつて有りやしない、先生の主張で一息に『大原新町』迄下りる事にはしたが、サテ歩き出すとこたえる事甚しい。『新町』では所謂「ちむどん」を喰べた、菓子代りに出した柿の砂糖煮は甘露の味がした、先



生も生れて始めてだと云ふ、頗る珍味だ。

峠は別に大した難所ではないが、荷があるので實に苦しかった。『大原新町』の茶屋では頼りなしにキュースに湯をつぐので、蓋をする間がなかつた。名物ろむどんの膳について來た海苔の色には實に驚いた。(鷗)

『追貝』迄は無事に着いた、宿の名は「よどや」と云ふ、暫らく休んでスケッチに出る。『追貝』の地はかつて丸山先生や吉田先生も來られたことがあつて、頗る奇勝に富んで居る、『吹割れ』の如き實に雄大な景色である。一枚岩の川底が兩方から迫つて來て間は深く落ち込み、兩方の岩の上をサラ／＼と流るゝ水は此處に落ちて瀧をなす、水煙は湧然と上る。兩方の岸は數十丈の岩山で『日光』の『大谷川』箱根の溪流はとも比べものにならぬ。スケッチ一枚。それから『千年橋』の下で再び三脚を据える。こゝは又『吹割れ』と違つて恰も『コロラド』の如き趣きがある、切ツた様な岩が數十丈の高さをなし、水は青く黒くインデゴの如き色をなし渦を卷いて押す様に流れ下る、コゝに一條の鐵道が有つたならば、都の人は何かに喜ぶだらうと思つた。

『吹割れ』は實に奇景である、そして極めて壯大である、この溪流に突出した二丈程の高さの岩がある、水の侵蝕で弓形をなしてゐる、頂上は廣き處で一尺程、狭い處は二三寸しかない、『吹割れ』の景色を畫くには是非此上からでなければ出來ぬ、初のうちには怖がつて、上を歩行くのさへ容易でなかつたが、いつか皆々此上で道具を展げ出した。

『千歳橋』の下數十丈、その水の渦をなしてゐる處の色は實に悽愴を極めたものである、『華嚴』も古い『淺間』も面白くない、厭世家はこゝへ來たらよからう。(鷗)

雨に降られて宿にもどる、火鉢に火を澤山盛つて來たのは不思議だと云つたら、先生に土地が高いから寒いのだと説明された。宿の部屋は天井が馬鹿に低い、鴨居とスレ／＼で吾輩は大に警戒を要する。一枚の額がある、鴨居の上へかけることが出來ぬため天井へ打つけてあつた、寢ながら見るのに都合がよい。定さんの豆は更に二つ三つ殖へた。

隣室の婆さんの咳でよく眠れぬ、雨がパラ／＼おちて來た。

(鷗)

七月十四日 晴 時々小雨あり

蚤に攻められて眠さむ、七時半出發。

宿の亭主は『戸倉』迄は平ですと云つたが、何實際はソウでない、登つたり降つたり小山を幾つとなく越えたので昨日よりも却つて勞れた、途中一番困つたのは、『戸倉』の宿まで行つてる筈の來が未だ『土出』に在ると云ふのだ、僕等はとも此の上荷物は脊負へず、と云つて村の者は養蠶時なので一人として遊んでる者もなく、思案にくれたが、『戸倉』の宿の親切によつて、あとからこゝ迄取りに來てくれた。

晴れたり降つたりで、草が濡れてゐて休むことが出來ぬ、『沼田』から『戸倉』へ送らして置いた來はことによると『土出』にあるかも知れぬといはれて問合せることにした、それがため

道も大ぶ損をする、米の運搬にも一方ならず心を勞した。道の兩側には二丈も三丈もある桑の太木がある、場處によつては夏子の盛りであるのに、此邊ではまだ春の蠶が繭にならぬ、桑の木には『越後』から來た桑摘男が、枝にとまつて頻りに俗歌を謡ふてゐる。

清水を見つけて懷中サイダーを飲んだ、甘露とはこんな味をいふのであらう。(鷗)

路は『片品川』に沿ふてあつて、驚も鳴けば、河鹿もなく、岩に碎ける水の音も聞こえる、三松橋(土出村)からは河原の近くを行くので石ころ／＼と足が痛い、一時には『戸倉』に着いた。

『戸倉』の宿は「たまと屋」と云ふ、一家そろつて親切者だが、蠅が多いのには實に閉口した。

よくしたもので、茶菓子に蠅へ入つてゐる、蠅よけには他に工風はあるまい。早速晝飯にありついた『戸倉』邊の米はトテモ口には入れられない様にきいたがそうでもなかった。(鷗)
晝食をすますと夕立があつてゴロ／＼と雷が鳴る、赤城君と僕は稍々へコタレ氣味。夕立直ぐ止んだのでいざとスケッチに出かける。

山道を十數町往つて寫生を始めた、途中で泰さんは靑大將を一匹殺して頗る元氣だ、定さんが怖がるので傘杖の先へ吊して振り廻してゐた。(鷗)

麥が未だ畑にある、黄金なすと歌はれるのも都近くで、こゝでは光澤のない橙色である。夕食は名物そばの御馳走。

宿は山里に似ず湯もよし便所も氣持がいい、明日は登山と思へば氣もそゝろに勇むのである、暫らくは音信が出來ぬと云ふので各々澤山の繪葉書をかく。

蕎麥の味は中々よかつた。さて翌日の人足を宿へたのむ、果して人夫がないといふ、宿でもいろ／＼都合して、兎に角沼の傍迄馬をやりませうといはれたので一同大安心をした。

小屋の様子をきいて見た、『檜の突出し』といふ處の小屋は多分役に立つてあらうとの事、吾々はそれを『檜の御殿』とよんで、その地を想像して大に勇み立つた、併し明日から當分疊の上には寢られぬと思へば何となく妙な氣もした。(鷗)

七月十五日 快晴

天氣は好し、宿の息子が馬を引いてくれて重い荷物は皆それへ着けたので、肩の軽くなつた僕等は辨當だけ持つた、元氣旺盛である。宿を出て暫らくすると神祠がある、荒廢見る影もないが、今日の門出を祝ふて皆々禮拜する。

神社からは草の中に分け入るので、左の山も前の山も只靑々として草の山、山樗毛、白樺の太木が處々に居を構へて自然に茂つた其姿を誇つて居る、右は『片品川』——川とは云へモウ溪流である——をへだて、鬱と茂つた森林、ツイ其裏手の山は『物見山』と云ふので、そこへ上れば眺望が非常によいそうなる。行くに従つて山樗毛白樺の太木は漸く多く、ハテは鬱密たる森林をなすのである。雪に朽ちた橋を渡る事五六度。

溪合に山躑躅の花を見た、野には擬寶珠の花がうす紫に咲い

てゐる、草は和らかな緑で、向ふの山の上から轉り落ちたら

さぞ面白からうと思ふ。(鷗)

馬子に教へられたので、赤城君が傘杖で掘ると出たは／＼黄金に非らず、此の眞夏に雪の層、テンデに大きな塊を手にして行く、氷砂糖とまぜて頬張る、實に甘露の味。

『戸倉』より四里橋なき谷を徒歩すれば、銅山小屋、こゝから愈々『尾瀬峠』の難所である。急坂、

イヤ坂などと云へた義理でなし、大きく云へば先づ流の底を

擧ぐるので足はビシヨ濡れ、心持の悪い事、今時そんな贅澤も

云へぬので、馬の御尻について行くが息が續かぬ、幾度となく

休むので矢張り後れてしまうのだ、それでも十二時過ぎには頂上につく、晴れた時には『富士

山』が見えると云ふが今日は雲と山と遠く／＼接して居るのみ、然し見えぬのは却て幸で、見

える時には翌日必ず雨がふるとのことだ。

こゝは一名『沼山峠』ともいふて、随分急峻である。馬は平地ではノロクサくつて間だるく思つたが、上りは實に早い、そしてこんな石塊ばかりの中をよく四本の脚で歩けたものだ



と感ぜざるを得ぬ。

頂上は光景一變、樺の巨木が處々にありて、根曲竹が一面に茂つてゐる。まだ湖水は見えぬが、キラリと眼を射る、兩三點の残雪を頂いた『燧ヶ岳』が當面を壓して峙つてゐる、やゝ遠くには『武尊』『至佛』の諸山が見える、吾等は今迄の苦を忘れて一同快哉を叫んだのである。(鷗)

ある。(鷗)

足もとには名も知らぬ高山植物が路に沿ふて一面に生へて居るが、それ處か足が痛くて。峠から數町下つて湖の畔に出た。湖から稍々行くと小川がある即ち『群馬』『福島』兩縣の境である、『檜の突出し』は此の境界木標の所から出て居る半島であるが、馬子に其の半島にある小屋を見に行つてもらつたら、屋根がなくてトモ駄目だと歸つて來

た。止むを得ず暫らく進むと、花咲き亂れた稍々廣き原がある、街道は其原を横切つて居るが、路の右側一丁許りに又一軒の小屋が有る。此の小屋はツガの倒れた根を利用して造つたものだが頗る粗、それでも雨位は凌げるだらうと先づ其れへ入つて晝食。

峠の下りは道がわるい、可なり困苦して漸く湖畔へ出た、一同非常な疲労である、湖畔の小流で馬子が『手捕にして呉れべい』と小魚を追廻したが終に、捕れなかつた。

『檜の突出し』がタメと極まつて、榎の根の小屋へ御輿を据へたが、三坪ばかりの突出した家根があるばかり、東と北は圍ひがなく、西は榎の根株、南は榎の幹、そして地面には枯草一つない、このジメ／＼した土の上に今夜から寝るのかと思つたらツク／＼情なくなつた。(鷗)

馬子が六日目の再來を期して歸つた後で、『檜枝岐』の漁師の老爺が來た、其の話に、約七八町の彼方に之れよりも上等な小屋が五六軒有ると云ふ。夫れてはツツチへ引越そうと、尻の落ちつかぬに早や荷を肩にエツチラオツチラ十町近くの道を引き移つた。

これよりも増しな小屋があると爺さんからきいた時は實に嬉しかつた、そしてこゝでは、たとへ通行人は一年に何人といふのでも、兎に角往來に近いので、留守にして置くのに不用心だからと直ぐに引移りに決したのである。

「草原に蛇でも居はせぬか」と爺さんに訊いたら、「高山でガスによつて蛇や蝮蛇のやうなものは居りやせん、たゞ蛙と兎ばかり、そのほか狐一匹居り申さん」と云はれて大安心。

それから、爺さんはこゝいふことも云つた、「小屋はヤクザだがそれでも年に幾人か岩魚捕りが來て泊るのだから、留守の時は火を消して置いて下ッせ、そして用達場も極まつてゐる

のでガスから、ソコラヤタラにやらかさぬやうにたのみヤス」と。

いよ／＼引移る時に、「幾日ばかり居るか」ときくから、「五六日だ」と答へたら、「ハハア明日は歸るべいに」と大輕蔑口調で獨語してゐた、吾々には此無人の山中に辛抱が出來ぬものと思つたのであらう。(鷗)

四五軒の中一番右の端の小屋に陣取る、屋根は矢張りツガの木葺き、床あり、匏屑を以て疊となす、上等々々、僕等は早や『尾瀬御殿』殿上の人と成りすました。時は夕、腹は北山に近づいたので、夕餐の仕度に取りかかつたが、出來上つた食卓は二三枚の板をならべたゞけ、水筒の花瓶^{ハナイケ}には、赤に紫に珍らしの高山植物を以て彩られた、香ばしいハムのおカヅ四人で祝飯を上げて萬歳を三呼する、あゝ愉快々々。

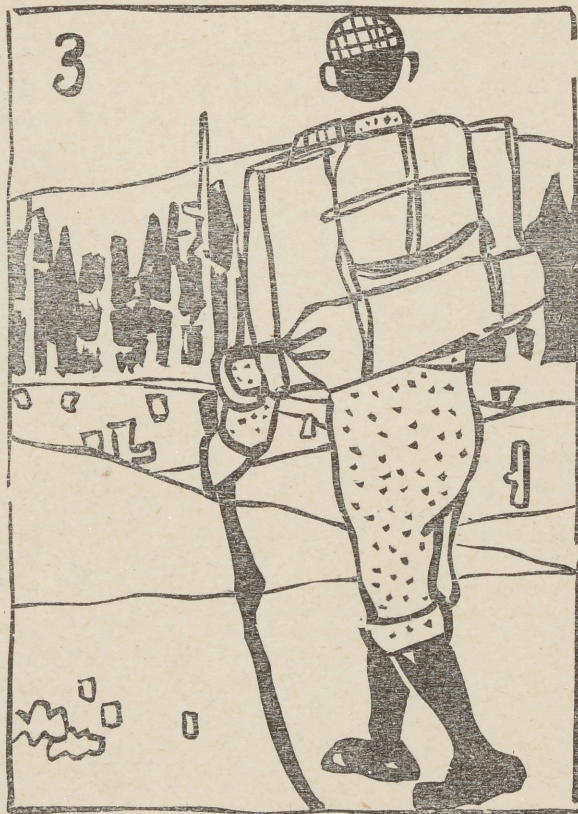
小屋は四坪程で、奥の方は火を焚く處になつてゐる、中央疊四ひら程の場處には、榎の匏屑が敷いてあつて、床は乾いてゐる、入口に接した處は全くの土間で、西は崖、南北は榎の薄板やら葉付の枝で圍ひ、東は入口になつてゐて、勿論戸も何もない、屋根は榎の枝で葺いてあつて、僅かに雨露を凌ぐに足る。この小屋は篩の側を造つた跡で、近處に焚つけの薄い木が澤山あつて極めて重寶であつた。

早速馬子から借りて置いた鉋で、白樺の枝を切つて薪をこしらへる、流れて米を磨いて飯を炊ぐ、目出度夕飯も濟ませたが、食事中蚊とブトの多いのには閉口した。

飯がすんだら、直さんが用達をしたいといふ、爺さんの云つた一定の場處が何處か判らぬ、四方をたづねたがそれらしいものが見當らぬ、小屋の向ふの大木に、二本の丸太が三十度の角度で立て掛けてある、或はそれかと往つて見たら、それらしくもあるが、下に紙片一つなく、汚物も見えぬ、考へて見ると、汚物の見えぬのは雨で流れて仕舞ふからで、紙片のないのは無論そんな贅澤なものを使用せぬ爲めであらうと、とに角此處に極めて仕舞つた。

便所としたら恐らく世界中第一等ではあるまいか、前には雪を頂く高山聳え、左は洋々たる大湖、右は姿やさしき白樺の深林、後ろは百花競ひ咲ける高原である。そして美しき花の香りこそすれ、厭ふべき臭氣は少しもない。たゞ四方開け放しはいさゝか極りが悪いが、これも知つた中であるから我慢も出来やう。

やがて靜かな夜が來た、かれて用意の西洋蠟燭を出す、薪を盛んに燃して脚絆や足袋を乾す、蚊が盛んに出て來てうるさい。疲れたので早く寝ることにする、まづ鉋屑の上に油紙



を敷き、その上へ毛布に包まつて横ばり、更に兩外蓋を上からかけた、そして着てゐるものは、冬のシャツ二枚、ズボン二枚、(ある人はシャツ四枚も着た)夏洋服に、手袋もはめ足袋も穿いて、頭から蚊防具を冠つた。吾輩は篩の輪の上に板をのせ、その上にゴム枕を結びつけた、直さんと泰さんは

雑具入や風呂敷包を、定さんは米の袋を枕として、燈火吹き消し寢に就いた。

正しく寢てゐると蚊は螫さぬが、横向になると工合がわるく、忽ち喰ひつかれる、そして耳の處へブーン／＼と來るのは如何にもうるさい、ゴソ／＼としてゐたが、それでも晝の疲れて一同いつか夢に入つた。(鷗)

七月十六日 雨

昨夜は馬鹿に寒むかつた、其くせジヤケツに冬のズボン下、ケツトに油紙を頭からきて、手袋をして、足袋をはいて、蚊帳をかぶつて寢たのだが、寒むい、僕の寢坊が目を覺ます位だもの其寒い事非常なものだ。

たゞに寒かつたばかりではない、何だかテン／＼と音がする、夢うつゝに手を出して見ると、そこら中濡れてゐる、いつの

間にか大雨になつたと見えて、着てゐる毛布の上に水が溜つてゐる、大變だ、早速燈火をつけて見たら、枕元とも足元とも、處嫌はずの雨もりで、手もつけられない、ヤット二三ヶ所大穴を防いで、益小さくなつて再び横になつた。(鷗)

今日は朝から雨がシト／＼と降つて居る、恰も梅雨のその様に、只音もなく蕭々と降る、葉摺れの音さへゴツともせぬ、靜かな雨だ。

先生と僕とは同じ側に居るのだが、此屋根の雨を通してポツリ／＼漏つて居る、これは大變と二人で直しに取りかゝる、此板をこつやつて、彼の板をあゝやつてと家の中から屋根を直すのも亦下界では出来ない事だ。晝は先生御持參のさらし餡汁粉で腹を肥やす。赤城君は小屋の入口から表を居ながらにして寫生する、先生は繪葉書の製造中、八木君は又それを繪の中に入れて居る、僕は昨夕食卓を飾つた花を寫生して見る。

僕は餘程寢坊に生れたのだ、二時頃からウト／＼と寝てしまつた。

雨の小屋住ひはまことにミジメなものである、顔を洗ひにゆくにも小川の處までは三四十間はある、濡れた草鞋をはいて、ジク／＼した草原をゆくのはあまりよい心持はしない、足の先はわるく冷たい、炊事の仕度も容易でなく泰さんの勞を多しとする。

『東京』を立つ時『尾瀬』の小屋で樂しむべく、銘々菓子を携へることゝした、種が判つては面白くないといふので、秘しか

くしに匿してゐた、昨夜は定さんのビスケットが出た、今日は雨降りて退屈といふので、吾輩が酒館と白砂糖と衛生餅とを出した、『赤城』の旅を忍んだのである、大鍋に一パイこしらへたが、見てゐる間に盡きて仕舞つた。(鷗)

夕方雨が上つたので、赤城君と八木君とに起されて裏の山に行つて見る。僕等は身を没する様な根曲笹を分けながら、白樺ツガの老樹枝を交ゆる裏山に入つたが、暫らくにして沼畔に出てしまつた、仕方なく汀について左した、老幹の根は何千年の苔が蒸して踏めば足ざわりがフツクリとする、時にはゴボリと落ちる事もある、左を見れば幹と幹と重つて、只苔臭い氣が通ふのみ、右は枝の間――スゲ足もとから水である、向ふの山は霞んで見えぬ。と見れば足下に黒豆がころがつてゐる。何？ 兎の糞である、必常昨日の老爺が云つた通り兎が居るに違なし、行く行く係蹄ワナのあとを幾つとなく見出した。

一旦小屋にもどつて、今度は赤城君と二人で始めの小屋へ行つて見た、路は原を越えて、半島のように突き出た森についてグルット廻つて又原をぬけるのである、一體此の沼畔の原と云ふのはムアールムアールランドであるから足心地の悪い事、それに路と云つても足踏みたはされた草を辿るのであるから心細い、放心ワツカリするとジブ／＼と足が入る。二度目の原に差しかゝつた時、丸木橋を通らうとすると黒い鳥がバタ／＼と立つた、ビツクリする間に沼の草に消えてしまつた。

小屋の中から白樺の寫生一枚、幸ひ夕方から雨も止んだ、此

間にか大雨になつたと見えて、着てゐる毛布の上に水が溜つてゐる、大變だ、早速燈火をつけて見たら、枕元とも足元とも、處嫌はずの雨もりて、手もつけられない、ヤット二三ヶ所大穴を防いで、益小さくなつて再び横になつた。(鷗)

今日は朝から雨がシトシトと降つて居る、恰も梅雨のその様に、只音もなく蕭々と降る、葉摺れの音もゴッともせぬ、靜かな雨だ。

先生と僕は同じ側に居るのだが、此屋根の雨を通してホツリ／＼漏つて居る、これは大變と二人で直しに取りかゝる、此板をこつやつて、彼の板をあゝやつてと家の中から屋根を直すのも亦下界では出来ない事だ。晝は先生御持參のさらし餡汁粉で腹を肥やす。赤城君は小屋の入口から表を居ながらにして寫生する、先生は繪葉書の製造中、八木君は又それを繪の中に入れて居る、僕は昨夕食卓を飾つた花を寫生して見る。

僕は餘程疲坊に生れたのだ、二時頃からウト／＼と寝てしまつた。

雨の小屋住ひはまことにミジメなものである、顔を洗ひにゆくにも小川の處までは三四十間はある、濡れた草鞋をはいで、ジグ／＼した草原をゆくのはあまりよい心持はしない、足の先はわるく冷たい、炊事の仕度も容易でなく泰さんの勞を多しとする。

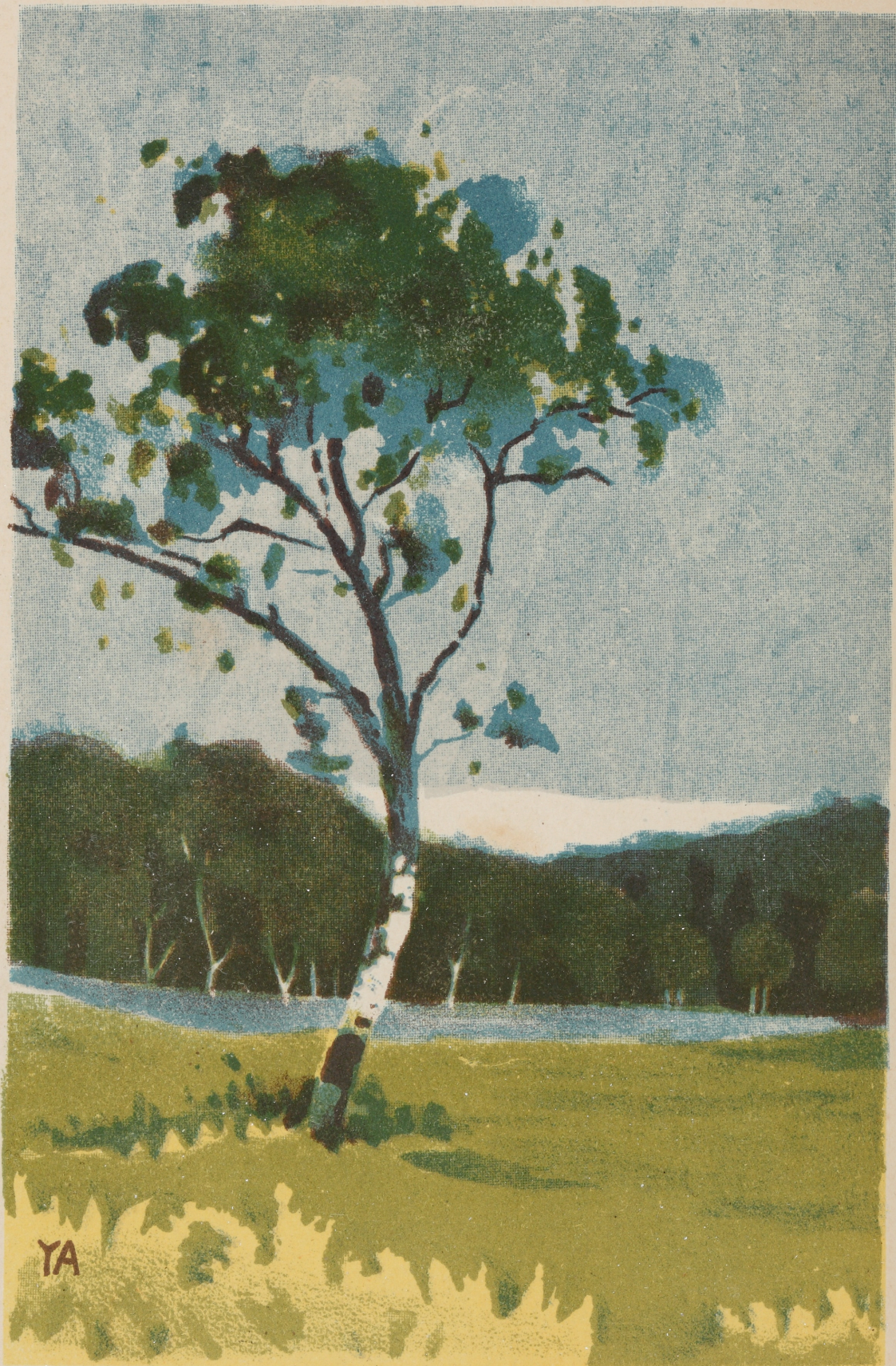
『東京』を立つ時『尾瀬』の小屋で楽しむべく、銘々菓子を携へることとした、種が判つては面白くないといふので、秘しか

くしに匿してゐた、昨夜は定さんのビスケツトが出た、今日は雨降りて退屈といふので、吾輩が酒饅と白砂糖と衛生餅とを出した、『赤城』の旅を忍んだのである、大鍋に一パイこしらへたが、見てゐる間に盡きて仕舞つた。(鷗)

夕方雨止つたので、赤城君と八木君とに起されて裏の山に行つて見ると、我等は身を没する様な根曲笹を分けながら、白樺ツツの老樹根を交ゆる裏山に入つたが、暫らくにして沼畔に出てしまつた、仕方なく汀について左した、老幹の根は何千年の苔が蒸して踏めば足ざわりがフツクリとする、時にはゴボリと落ちる事もある、左を見れば幹と幹と重つて、只苔臭い氣が通ふのみ、右は枝の間――スケ足もとから水である、向ふの山は霞んで見えぬ。と見れば足下に黒豆がころがつてゐる。何？兎の糞である、必常昨日の老爺が云つた通り兎が居るに違なし、行く行く係蹄のあとを幾つとなく見出した。

一旦小屋にもどつて、今度は赤城君と二人で始めの小屋へ行つて見た、路は原を越えて、半島の様に突き出た森についてアルツト廻つて又原をぬけるのである、一體此の沼畔の原と云ふのはムアムランドであるから足心地の悪い事、それに路と云つても足踏みたはされた草を辿るのであるから心細い、放心するとズブ／＼と足が入る。二度目の原に差しかゝつた時、丸木橋を通らうとすると黒い鳥がバタ／＼と立つた、ビツクリする間に沼の草に消えてしまつた。

小屋の中から白樺の寫生一枚、幸ひ夕方から雨も止んだ、此



分なら明日は天氣であらう、それを樂しみに今夜は早くから床に就いた。四方がジメ／＼して何となく心持はわるいが、それでも蚊が少なく、昨夜よりは夢が安らかであつた。(鷗)

七月十七日 晴

暖かならぬ一夜も明けた、青空が折々見える。『沼山峠』の方へ寫生に行く、途中『檜の突出し』を探つた、蓋し「突き出し」とは半島の意である、此の半島はツガの森林で、中に小川あり、『岩』『上』兩國の境界木標のあるのは此の小川の傍である、『突出し』の小屋は一昨日馬子の話の様に、トテモ雨露の役に立たぬ、見るかげもなく荒れて居る。こゝから峠迄に二丁許りの砂濱がある、砂濱を横斷して一ツの小流が沼に注いで居る、「ボヤ」と云ふ小魚は沼から此の小流を上るのだが、居る事／＼、水が奇麗で浅いからよく見える。僕等は繪の道具なんかソツチのけて魚取りに夢中になる、八木君はついに手取りの功名を爲した。

八尾を獲てやゝ満足しそれから寫生を始めたのは十時頃であつた、畫架を据えたのは街道筋で、『尾瀬沼』を見下ろす處で有る。日が脊中からポウツトさす、驚がなつかしげに友を呼ぶ、コロ／＼と鳴くのは高麗鳥であらう。ホー／＼と沼の方から人聲がする、わがて馬の脊が草の上に表はれた、『會津』に十餘頭の馬を求めた馬喰の其歸りであつた。

湖畔で寫生畫二枚を得た到る處アヤメとカンゾーが花盛りである。(鷗)

晝食は三時、頗る美味を感じた。

小屋の前の原で白樺の森を寫生する、其幹は白く森から浮び出る様、前には名も知らぬ白き花あり、遠く『燧ヶ岳』の淺雪淡しと云ふ景である、然し景色はいゝが蚊や蟻子が馬鹿に多い、オヨソ隙と云ふ隙は總べて其の襲來を蒙むらざる處がない、早々三脚をたゝんで夕食の仕度に取りかゝる。夕食はそばがきの御馳走だが、そのみでは足りぬので豌豆まめ腹をふくらす。赤城君の御菓子が出た。

原中の寫生の時は、泰さんと定さんとは起つてゐて描いた、足の下には清水が四五寸溜つてゐる、踏んでゐるうちに段々水嵩が増す、蚊とブトの襲撃が獰猛で、一重の脚絆を穿いてゐた定さんは、其上から螫されるので絶えず兩手で脚を叩いてゐた。

夕飯の蕎麥搔は大失敗、鰹節はわるく硬く中々搔けぬ、製法不馴のためダマが澤山あつて變妙なものが出來上つた。

夜の泰君の出品は振つてゐる、石ゴロモと甘納豆、但し遠路御持參のため石ゴロモは一つとして形を爲してゐない。(鷗)

夜の『尾瀬沼』——是實に寂寞の境である、日が西に沈むに従つて鳥も鳴かなくなる、風さへ音を立てぬ、眼に映ずるもの——森も山も沼も原も一刻一刻闇の霧に覆はれてしまふ、それが丁度ドコか深い／＼谷へても落ちて行く様である、いくら耳をそばだてても聞こゆるものは暗!!無!!虫の音は靜さを増すものであると云ふが、絶對の「靜」は更に靜である。尾瀬の夜を味はずば寂寞を口にし詩に賦する事は出來ぬのである。

此小屋に着いてから、夜分小便にゆく者が無い、吾輩は毎晩不得止出かけるがあまりよい氣持はしない、今夜は耐え兼ねてや定さんが恐ろしく出かけたが、一定の場處迄往かずにつゝイ小屋の近くでやらかして仕舞つた。(鷗)

七月十八日 半晴

天氣はあやしいが『尾瀨ヶ原』に向ふ、向ふと云つても道を知つて居るのでなし、只先生があつちの方だと云つたので其の方へ進んだばかり、随分無鐵砲な次第だが一向心細いとも思はなかつた、それでも型^{カタ}ばかりの路が根曲笹の中について居る、それが丁度トンネルをなしてるので上からはとても見えぬ、只足さぐりて進むのだから、木の根に躓く事數度であつた。

或時は沼の中を渡らねばならぬし、或時はズブリ／＼と脚半迄泥だらけにする事も有る、半里許りで『堂小屋』に達した。『堂小屋』は『燧岳』の遙拜所であるが、ひどく荒れて居る、四圍の板かべには此處へ來た者の姓名が鉛筆やら墨やらで記してある、『武藏國』の住人と名乗るのもあれば、『岩代國』何々郡と正直なものもある、風流人は歌を詠んである、山岳會の諸士のもある、僕等も日本水彩畫會云々と記して更に進む。

此の附近ツ、ヂが多い、萌え出た草の緑との調和が美しい。森を幾つとなく越して河尻附近に至れば一つの原がある、さのみ廣くはないがイワカミの花が盛りである、丈高からぬ常緑の老木は配置よく自然の庭をなす。沼の水はこゝから落ちて『越後阿賀川』の上流となる、道は此の川に沿ふて居るが、暫くは又

山に分け入るのだ。

『尾瀨沼』は南の岸は道がない、北の岸には僅かに『尾瀨ヶ原』に通ずる一條の細徑がある、沼は丁度柏の葉の形をなしてゐて、其陸の水に突出した處は、樺やアスナロの巨木で林を成してゐる、また水の陸へ入込んだ方は、更に深く軟艸の澤をなして、そこには諸處水溜りあり、草の中には珍とすべき岩鏡や、姫石楠花、深山龍膽、其他名の知らぬ美しい小さい花が咲いてゐる、實に形容の出來ぬ美しい場處で、一同は夜の苦しみを忘れて、「ア、こゝに一生涯居たい」とか、「この儘死んでも惜しくはない」と、くり返し／＼言つてゐた。(鷗)

朽ち水の留つてる岩をよむると今度は切立てた様な山の中腹を横斷せねばならぬ。山は勿論密林で、根曲笹は到る所に繁茂して居る、道と云ふのは其根曲笹の寐て居る所を辿つて行くのだ、笹の根を踏めば／＼り落ちる、落ちれば數丈の下は『只見川』の奔流が岩に咽んで居る、傘も三脚も帶で脊中へ結付けて兩手で辛じて身を支へて行く、八木君は一度ならず／＼つたが幸にして事なくすんだ、此道ならぬ道には處々瀧の如き急流が奔出して居る、僕等は是非、これらをも渡らねばならぬ、渡ると云つて石を拾つて飛び越えるのだが、赤城君不幸にして足モトを狂はし腿まで泥中に没してしまつた。難道も盡き様とする處に直徑六尺に餘る大木が横たはつて居る、乗り越える事はトモモ六ヶ敷ので、下をくゞつたら、トゥ／＼傘の柄先を折つてしまつた。

沼に分れて山へ入てからの道は實に難澁であつた、低い處で

は少し油断をすると深い／＼水溜りに足をとられる、岨道は根曲竹の上をゆくので、一寸でも他見をすると數十丈の崖下

へ入り墮ちればならぬ。(鷗)

長い／＼森を過ぎて『尾瀬ヶ原』に出たのは十一時過ぎであつた。『尾瀬ヶ原』は坦々として際りを知らぬ、直径數里と云ふ、

森あり林あり川あり沼あり、皆一望の中にある、コバルトの山は其周圍をめぐるのだけど、肉眼には到底原と山との關係を見つくす事は出来ぬ。此の高處にあつては今丁度春である、春の『尾瀬ヶ原』は實に花の原である、花にはツ、ヂ、アヤメ、カンゾウ、それに名も知らぬ白赤黄紫の花々我世永かれと咲き誇つて居る。寸に満たぬ暖い緑の草も美しい、花と草との原はいつまで行つてもつきぬ、つきぬ向ふにコバルトの山が聳える。昨日迄の雨模様が今日晴れて空氣は多くの水蒸氣を含んでゐるから、コバルトの山は靨黴として霞んで居る。

原へ出た時は、暫時口もきけなかつた、活きて甲斐ある事をつく／＼感じた、風景畫家として、かゝる天然に親しく接す



る事の出来た身の幸福を心から感謝した、ア、此大景、此美觀、吾輩はこの刹那の感を生涯忘れぬであらう。

このバラダイスで辨當を開いた、辨當といふたとて新聞紙一枚あるでなし、竹の皮など元よりのこと、いろ／＼工風した擧句に、佃煮を入れてきたブリキ箱を、洗ひもせず其儘飯を

詰めて持つて來たのである。

吾輩はその四分の一を自分の大きなパレットの上に分配を受けた、箸の用意がなかつたから畫筆の軸で間に合せた、直さんはこの有様を見て、「これこそ眞に畫家の畫食だ」と

感嘆してゐた。(鷗)

日は午なり、駭蕩たる春の花原に三脚を据えて酔ふが如くに繪筆を握つた。數枚の寫生をして辭したのは三時頃であつた、戀々として去る事が出来ぬ、一行

の心は期せずして再來に一致したのである。

三時迄寫生して、それから花を取つて三時半迄に出發しないと、吾等の御殿へ歸るのに日が暮れる恐れがある、二里とはいへど三時間半はかゝる。

豫定通り寫生を終つてから、原の中を流れる『只見川』の岸あ

たり迄漫步した、寸にも満たぬ若草を踏んで歩行く心持は何とも形容が出来ぬ、若草の中には美しい山草が今を盛りに開いてゐる、紫の莖もある、白い金米糖のやうな美しい花もある、真紅の小さな蘭の花もある、あてなしに一握の草を摘めば、その中に姫石楠花は五六本も混つてゐる、地は一面の毛氈苔で、勿體なくて足の踏處もない、ある處にはオレンジ色のカンゾーと、ヴァイオレットの深山アヤメと、地の見えぬ迄亂れ咲いて、かたみに艶を競ふてゐる、三里四方の高原は何處迄往つても皆このやうに美しいのである。

一巡して元の處迄歸つた時、急に定さんが考へ出した、顔の色は忽ち紅く忽ち蒼くなつた、「ドーしたと泰さんが訊いたら、「漫步してゐた時杖にしてゐた傘立を何處かへ忘れて來て仕舞ふた」といふ、此大原野に、三尺にも足らぬ一本の棒は尋れやうもない、そして歸途の時間も逼つてゐるが、親切な泰さんは、心配して定さんと一しよに今歩行した處を探しに往つたが、終に見出なかつた。『尾瀬ヶ原』に傘杖が生へてゐる譯だから數年の後に往つたら、さぞ大きくなつてゐるだらうとは歸途の戯言であつた。(鷗)

歸りは又苦しい／＼思をして、小屋に着いたのは八時頃、足もとも暗い時分であつた。赤城君も八木君も勞れたので食後脚絆をほしながら寢てしまつた。

飯をたくことも出来ぬので、今夜も蕎麥搔をやつた、定さんが鍋の中へ手突込んで搔廻したのはよかつたが、粉の固ま

りが手に着いてドーしても取れないので大騒ぎであつた。

(鷗)

七月十九日 小雨

朝から霧が大變深い、森も山も見えたかと思ふと直ぐ消されてしまふ、身體もシツクリとする、寒い日であつた。

午前は小屋の前の原にある柳を寫生した、一同が二枚目にうつつた頃小屋主の老漁師がやつて來た、丁髷の頑強な大男で年は六十位だらう、『會津檜枝岐』の人である、ドコか北國的の所が見える。僕等を見て非常に驚いた風で「お前達ア一體ドツカラ來たやあ」と赤城君に尋ねた、先生が悉しい事を話されたので安心したらしく二十四匹ばかりイワナを取つてくれた、此のイワナは尾瀬沼に居る魚類の名で中には鱒よりも大きいのが居ると云ふ、随分澤山居るものと見えて彼の老爺が二十四捕るのに十四五分しかかゝらなかつた。毛針だから餌なんか要らないんだ。二十錢の小屋代を拂つたら喜んで又イワナを取つてくれた。「ソウデガアンス」は振つて居た。

岩魚捕りの爺さんは、『只見川』や『尾瀬沼』で釣つた魚を、小屋の中で焼いて『若松』あたりへ持つて行つて賣るのだそう
な。

此小屋は、今では爺さんの持物だといふので、二十錢やつたら大喜び、併し考へて見ると随分高い家賃で、一日四錢なら月に壹圓貳拾錢だ、物の高い『東京』でも、この體裁の家でそれ丈けの家賃は取るまい。(鷗)



午後は『堂小屋』附近に出かけた、彼のツツジの庭も繪に入れた、觸れたらば溶けそうな若草の緑が美しい、霧は矢張り深い。

『尾瀬湖』畔の景色は雄大といふのでもない、又優美一方でもない、兩方を兼ねてゐるので、風景としては、吾輩が今迄歩行いた處では以上の場處はない、一ヶ所に三脚を据へたら、只其體の方向を變へさへすれば何處でも繪になる、一つの場處で、五枚や六枚の趣の變つた繪を作ることが出来る、實に景色の美は絶對で、ドンナ趣味 人でも、此自然に對しては不服 出處があるまい。

森の影には白石楠花が眞盛りである。(鷗)

夕食は八木君の料理でイワナの御馳走であつた、懷中汁粉も出た。

今宵一夜が終りなので、先生はピストルを空に發つ、音は寂寥を破つて森から森へ山から山へ響き渡つた、僕等も各々一發づゝ發つ。何となく氣がスーッとする様だ。蠟燭も二本つけた、今日迄物も言はなかつた八木君は急に元氣が出た、屋内は頗る賑はつた、「實は夜になると電車のゴウツと云ふ音が聞きたくて」と云つたのは僕だ、赤城君は「晝間はいつ迄も居たいと思ふが夜になると歸りたくなつてしまふ」と云ふ、銘々心弱い事を白狀した、先生は朱の盤の化物語をされた。

寢しなに赤城君の足の方でガサ／＼と音がする、赤城君は薄氣味惡るそうに搜したがモウ音もせれば形もわからぬ、暫くすると又ガサ／＼云ふまた搜す、わからぬ、復ガサ／＼する搜す、

わからぬ——益々氣味が惡い、兎かも知れぬと云ひ出したが誰一人表へ出る者が無い、仕方なしに四人一時に飛び出して搜したが、ヤツバリわからぬ、結局蝦蟇と云ふ事にしてしまつた。

夕飯は實に結構であつた、ハムも少々飽きたし、佃煮も鼻についた、一番／＼かつた茄子の辛子漬はト／＼になつた今日、捕りたての岩魚といふ御馳走がある、目の下尺五寸もある大きい奴が、ヂュー／＼焼けるのを待つてゐるこの樂しさ、い／＼箸をつけ 見ると、是は又非常の美味で、一同喜色满面飽くまで語込んだ。

此夜は最後といふので皆々元氣だ、蠟燭は 挺も灯して大に景氣をつけた、直さんの出した懷中汁粉は十個ある、一人前二つ半だ、盛んに湯を沸してすゝり初めた、吾輩は面倒だから二つ半二度に茶碗へ入れて飲んで仕舞つたが、中には大切がつて半分宛入れて五杯にして飲んだ人もある、數日前飲んだサイダーをなつかしがつて、その空壺の匂ひを嗅いて喜んでゐる人もあつた。

割合に暖かで、携帯の懷爐は用ひずに濟んだ。(鷗)

七月二十日 晴

昨夜八木君が異様な聲を出した、其聲は實に奇々妙々で、高調な濕つばい、ものに客忤える様で、泣くが如き聲で有つた。僕は驚されたのかと思つたら當人一向そんな事は知らぬと答へるがトウ／＼『尾瀬』の山羊(八木)のなき聲になつてしまつた。

下山の日なので朝から荷物の取り片付に忙がしい、何しろ街道迄出かねばと云ふので、最初に着いた小屋迄引越して、こゝで馬を待つ事にした、然し時間が未だ早いのので、「檜の突出し」の方へ行つて水芭蕉を寫生した、水芭蕉は其丈四五尺、葉は巾廣く花は目立たぬ、濕地に多く生へて居るが、活き／＼した威勢のいゝ草である、數ある草の中でこれのみ泰然とかまへて居る。書食がおへても馬が來ぬ、其中には來るだらうと花などをスケツチする、赤城君はツガの木に登つて方々を眺めてゐる、十二時半になつた、まだ來ない、ドウしたらうと云ひ出した、來なかつたらドウする、一時になつた未だ來ない、ドウしよう、餘りにをそくなれば荷物を脊負つて、出かけ様と迄云ひ出した、漸く一時半にやつて來た。歸りは白樺の杖を作つて降つたが、大變路が悪くなつて居た、殘雪も既に消えてしまつた、豆が出來て足が痛い、『戸倉』へ着いたのは七時であつた。

此大自然に別れを告げるのは苦痛である、苦痛ではあるが仕方がない、モ一米も残り少なくなつた、そして迎ひの馬も來ることになつてゐるのである。

なつかしい小鳥の聲に送られて、再び元の道を『戸倉』へ歸つた、『玉城屋』へ着いた時は既に暗くなつた、久し振て疊の上に座つたが、何だか急に大名にでもなつた心持、七日目に湯に入つたが、垢の出ることは恐ろしいやうである。初めは『尾瀬沼』へ飛込んで水浴でもやる積りでゐたが、どうして／＼あの寒さで誰れも身體一つ拭いたものはない。

夕飯も不味ではなかつた、固くとも綿の厚い蒲團の上に寝た感じは又格別であつた。(鵜)

七月二十一日 半晴

午前六時半最初の様に荷物を脊負つて『戸倉』を出る。

『土出』迄はもとの道、そこから峠を一つ越えて——勿論近いときいたから——『小川』に出た、『小川』は峠の直ぐ下で温泉があると云ふ、『日光』の要路に當つて居る、往來に腕木を出して横文字の看板(宿屋の)はいやな感じだ。

山の裾を川について行くと、しまいには川原に出る——川は名の如く小河と云ふのであるが——川原に二軒ばかり湯槽のある宿屋がある、今丁度一軒の方で、十位の娘が舞の最中で、紋付きの男が三味線を弾いて居る、宿の人は皆見物して居る、山間の樸民はこれらを以て唯一の樂として居るのであらう。幾度か山を越えては川原に出、又山に入つて川原に出る……少々行けば牧場がある、牧場と云つても原ではない、山と云はず川と云はずこゝら一圓總べて牧場になつて居るのだ。小河の水は硫黄分を含むので飲まうにも飲まれないが、此牧場に入つてから清い流があつたので、僕等は涼を入れる爲、石に腰を下ろした、馬の鳴き聲がすると思つたら小供を連れた母馬がやつて來て何か求むる様であつた。

一里許で『一の瀬』の一軒家に着いた、道はそこから急に傾斜を増すのである、始の中は溪流に沿ふて行くが、それを離れたが最後水一滴だつて求むる事は出來ぬ。道は山の窪みを奥へ／＼

と行く、千年の朽葉朽木は水を含んでシットリと、樹は枝と枝と交はり葉と葉と重なつて空さへ見へぬ、鳥も鳴かねば風も吹かぬ、音と云ふのは脊中のスケツチ箱がガタ／＼するのみ、赤城君と僕は草鞋の紐を結ぶ間に後れてしまつたので淋しきは更に淋しい、先生達に追ひ付かうと思つても中々に追ひつけぬ、それに咽喉が渴いて仕様がな

い、八木君にもらつた鳥貝をかわで漸くツバを飲み込んだ。

道は更に傾斜を増して左手の峯に登るのである、先生達は其上で待つて居られたので、こゝで辨當を半分ばかり食べた、残りは水のある所で食べ様と云ふのだ。峯へ登つてからは尾上傳いであるが景色は益々暗く深くなつて行くのである、常暗に通ずる路の様だ。

常暗の道は盡き様ともせぬ、十

二時になつても、一時になつても二時に成つても、唯陰氣な暗い淋しい道を行く四人は、荷物のすれ合ふ音と足の地につく音のみを靜にきいて行くのであつた。僕にはこれ以上、此の道の印象はない、イヤモット強い／＼ものはあるが、餘りに強い印象は此の僕の小さな脳に入りきらぬのだ。



『小川』から『笈沼』迄三里ときいてゐたが、いくら行つても沼らしいものが見えぬ、道を違へたのかと思つた、山道でもこんな時間にこのかゝる筈はない、皆んなの時計が間違ふたのではないかとも思つた、此道程困つたことはない、今度の旅の中で一番難澁であつた。(鷗)

『笈沼』に着いたのは三時頃である、途中、只小さな沼が一つ及び『白根』登山口と記した古い石と其傍に鳥居があつたばかり。『笈沼』には一／＼の冷たい流が注いで居るので、こゝで辨當の残りを食ふ、糠の様な数知れぬ蟲が襲來したが『尾瀬』で修業をつんだ身には別に驚く程の事もなかつた。『金精峠』の最難所は愈々これからである。

笈沼は小さいが中々幽邃でよい、沼の岸には少しのムーア

ランドがある、併し『尾瀬』を見た目には晝架を据へる氣になれぬ、そしてそんな時間もない、もしこれが道の半分として、是れから『金精峠』にかゝるとすると、今夜中に『湯本』へゆけるか、否もわからぬといふ、大事の場合である。(鷗)

此の最難關は四十分にして攀ぢ登つた、然しこの短時間の苦し

みは實に甚しかった、「ひどい、なア」の嘆聲は知らずして出る、頂上に達した時『日光』の方は霧が深くて景色は見る事が出来なかつたが、山の神秘を感じたのである。くだりは、二三年前にあつた山崩れのあとを——八九十度の傾きの所を、ウネリクネリと降りるので足もとが非常に危ぶない、動々ともすればズル／＼と迂りて落ちん。それでも一度休んだばかりで、『湯本』の『米屋』に宿る。着いた足で『湯湖』の方へ散歩したが、外國人がテーブルを往來へ持ち出して傘をさして寫生して居たのは一寸變つた姿であつた。

一里以上ときいた峠だから、二時間ばかりかゝるものと覺悟して、兎角休みたがるのを勇氣をつけて、只上りに上つたら忽ち頂上へ着いたので、アツけないやうな氣がしたが、併し實に嬉しくも思つた。さて『湯本』へ着いて荷を宿屋の店先へ下し直ぐ湖邊へ往つて見た、水は暗く凄く、折から小舟が一つ浮んでゐて靜かでない、湖水としては『尾瀬』よりも深味があつてたしかに上だ、併し何分二三枚で描く處が盡きる程變化も乏しいし場處も狭い、雪のある『白根』の山もあまり近くつて畫に入れにくいと思つた。

『戸倉』では南京米を使ふのであらう、口へ入れて齒ごたへがない、腹の減つてゐる時は何とも思はないが、朝飯はとても二杯とは食へぬ、この『湯本』も決してよい米ではないがさすがに『戸倉』の比ではなく、今夜の食事もうし振で快よく味つたとして直さんはモ―少しのお代はりをした。(鷗)

七月二十二日 曇、雨

起きると湯に入つたり繪葉書をかいたりして居たが、九時頃思ひ立つた様に『湯本』を出る。先づ『湯瀧』を見る。『戰場ヶ原』へ來ても『尾瀬』を見た眼には別に廣いとは思はぬ、白樺があつてもソウ珍らしいとも感じなかつた。けれど、『男體山』の麓、カラマツの有る邊は矢張り美しい景色であつた。『龍頭の瀧』を見て『中禪寺湖』について行く、道は至つて平坦である。『中禪寺』の町では先生の御得意の汁粉屋を尋ねるつもりだつたが、今は跡もなくなつてしまつたので、仕方がなく、パンを二十錢買つて、『華嚴』の莊を賞しながら食べた。

是まで幾度見てもよいと思つた『戰場ヶ原』は、まことに詰らぬものになつて仕舞つた。『尾瀬ヶ原』は其原の盡くる處が見通されなかつたが、こゝは直ぐ山の麓迄よく見える、『尾瀬』には美しい花草のほか石一つないが、こゝには原の中に熊笹もあれば雜木もある。

『湯瀧』の下で一もとの車百合を得た、根を水苔で包んで大切に持つて來た、どうかこのまゝ『東京』迄と心に念じつゝ。ついこの間來て見たばかりだが『華嚴』はやはり壯大である『太平』邊の白樺は見るに耐へぬ、そして此邊に啼く鶯の聲はとても『尾瀬』山中の嬌音と比較にならぬ、あゝ下界へと段々近づいた哩と大に心細くなつた。(鷗)

『馬返し』は舊道中の近路をよつて下る、僕は餘り威勢よくおりたので二度ばかりも迂つたが、先生曰く「二度ある事は三度あ

るぜ、僕も傳染しない様に用心しやう」と云ふが早いかズル／＼ドウと足をすべらした、此時から先生のズボンには穴が明いた、「つた屋」では力餅をウンと食ふ。

「葛屋」を出る頃から雨が降り出した、僕は傘が折れて役に立たぬので外套を頭からかぶつてあるく、脊中に荷物があるのでホンの頭に乗つてゐるだけ、下の方はビチョ濡れなのだ、足尾に通ずるレール道を行く頃はたゞきつける様に降つて來たが如何ともする事が出來ぬ、なさけ無くなつちまう、けどもしまいには焼け糞で歩いた。

雨は『日光』の町近くなつた頃止んだ。

數年前遭難の當時のことなど考へつゝ雨の中を停車場へと急いだ、『日光』の町近くなると、俗な色がチラ／＼見えて來る、折角神聖になつた兩眼を汚されるやうな氣がしてならぬ。

『尾瀬』の色には嬌めかしいものがない、ハデ／＼しいものがない、紅い色でも、紫の花でも、何でも實に氣高い色彩を呈してゐる、小指程の小枝にも薄緑の苔が着いてある、たま／＼赤い草の實^みがあれば、恰も珊瑚のそののやうに高尚な光りを持つてゐる、色彩の研究としても『尾瀬』は實に得易からざる處である、然るに下界へ來ると、忽ち藝者の紅い禪が見える、俗惡な彩色をした看板が目に入る、駒鳥や鶯の音に清められた耳は、忽ち輕薄な人間の言葉を聽かされる、寧ろこゝから再び『尾瀬』へ引返そうかとさへ思つた。(鷗)

赤城君と八木君とは見物の爲一泊する事になつた。先生と僕と

は汽車の時間がないので矢鱈に急ぐ、先生はコンパスが長いので僕はあとからかける様について行く、トテム間に合はぬと云ひながらも大急行をやつたが、合惡草鞋が片ッポ切れてしまつた、マ、よと片足は足袋はだし。

杉並木を左へ曲つて停車場の廣場に出る頃、鈴は鳴り終らうとする時であつた、先生は俄然走け出したので、僕も續いてかけ様としたが、其の時、スケツチ箱がパクリあいて白紙やら繪がバラ／＼と往來に散らばつた。茶店の女が知らせる、僕はあわてゝ拾ふ、下を向くと脊の荷物が落ちかゝる。夢中で拾つて夢中でステーションへ走け込んで、荷物がつかへるのを無理に車に入つたら汽車は動き出したのである。

間に合ふまいと思つてゐた汽車に辛ふじて間に合つたが隨分嬉しかつた、泰さんと定さんは宿屋へ荷物を置いて直ぐ來る筈であつたが、定めし停車場で口をあいて汽車の煙りを見送つてゐることであらう。(鷗)

列車は『上野』直行なので乗換もなく、半分は眠つた様に揺られて行く。窓から『日光』の山を見る、ア、モウ此のなつかしい山にも別れるのだ、これからは又平原の人都の人と成らねばならぬ、思へば過ぐる十日の間如何に僕等は得る處があつたらう。自然の愛子はなつかしき其の母に會ひに山深く分け入つて、今は再び奮闘の世に歸つて行くのである。

演習が有つたとかで白衣草鞋がけの巡查が大勢乗りこんだが、それも間もなく下りてしまつた。すると今度は、今の巡查が話

題になつて「巡査なんてかわいそうな者だ」と云ふのが始まりで、時事問題やら養蠶がドウのと滔々數萬言を吐く辯士が居た、車中の人は皆其方へ耳を傾けて謹聴した。眠氣覺しに面白かつた。『小山』のうなぎ飯もうまく食べて『上野』に着いたのは十時過ぎであつた。電車に乗つてから、あたりが明るいので何だか羞かしい様な氣持がした、どの人の顔も皆生き／＼した色をしてる、僕は自分が時代後れになつた様に感じた。

『東京』へ着いて人間の多いのに驚いた、電車は満員、折角『日光』でとつて來た車百合の花を損ふまいとの心配は一通りではなかつた、十一日目て吾家へ歸つて、草鞋をとき湯に入り、さて居間の座布團の上に腰を下したが、何だか半年も旅行してゐたかのやうに感ぜられた。(鷗) (終)

尾 瀨 拾 遺

△尾瀨附近に七月頃咲いてゐる花は、ミヤマリンドウ、ゴゼンタチバナ、チンクルマ、イハカヅミ、キヌガサソウ、カンゾーヤマツ、ヂ、ミヤマアヤメ、ヒメシヤクナギ等が主なるもので其他はいろいろあるが名を知らぬ、何れも高潔で美しいものばかり。

△植物としては武田氏の記載によれば、リヤウヅ、ハウチハカヘデ、トチノキ、ウリノキ、イボタ、マンサク、ハギ、ス、キ、ワラビ、ギバウシ、カラマツ、ミヅナラ、オホカメノキ、コバノトネリコ、ムラサキツリバナ、モミヂ、ハリギリ、ツノハシ

バミ、ネマガリダケ、ズナ、シラカシバ、キハダ、ナナカマド、アヲタゴ、ノリウツギ、ネコシデ、等を挙げられたり、吾等の見たるものとして此ほかに五葉の松、ツガ等ありき。

△一行のうちの植物學者は八木君なり。

△八木君で思ひ出せしが、入口で小用をした夜、幽靈話あり八木君ユーレンとお里言葉を出して一同大笑ひ。

△一行のうちの某君曰く「若し先生が居なければこの小屋の中で小便をしかねない」と。

△一行のアシヨールになつたると推して知るべし、手拭をぬらして乾かすのが面倒なために、臭くなつても洗はぬ人あり、土足のまゝ床に上つて夜は勿論その上へ寝るなり。

△紙屑を捨てるのにも、唾液を吐くにも、室内で寝ながら用が足りる、こんな便利な家は他にあるまい。

△食事の時テーブルとなるのはイッモ寫生箱なり、此箱の上へ、醬油もこぼれるし、飯もこぼれる、茶もこぼれる、濟んだ跡は匏屑で拭いて置く。

△鍋、茶碗の類は戸倉から持參せしもの。

△戸倉に鶏卵はない、沼田から一つ五錢も出して買つて置ても、十のうちの五つは腐つてゐるといふ始末。

△戸倉の馬の駄賃一日金貳圓也。

△草鞋は戸倉で用意すべく、一日一足位ひは入用と心得べきなり。

寄 書

洋畫展覽會を見る

坂 默 堂

松原氏天彩畫塾第二回洋畫展覽會は十月二十四日より博物場南館に於て開かれ申候、出品總數二百十餘點其内油畫チヨーク鉛筆等合せて二十點内外、他は皆水彩畫にして、出品者は大下、丸山、河合、大橋、吉田、五姓田、中川、満谷、鹿子木、渡邊文三郎、大森柳江、高田三五郎の諸氏、之れに松原氏及其塾生二十餘名に有之候。

斯の如く大家の作品比較的多數なると、其大部分が水彩畫なるとは、僕をして多大の満足を感じしめ申候、只遺憾なりしは、建物の構造會場たるに適せず、光線の工合甚だ惡敷、畫面に反射し、看者をして不快の感を與へたるの一事に候。

水彩畫に於て、場中白眉に推すべきは吉田氏の小川に有之、實に傑作と見受け申候、次に中川氏の田舎道、黄葉の村、河合氏の綠蔭、並木の朝、丸山氏の山頂深森、綠蔭、大下氏の多摩川、吉田氏の夕立、秋月夜、大橋氏の實り、五姓田氏の暮色等は何れも面白く唯々敬服の外無之候、其他塾生諸氏の作品に於ては、瀬野氏の秋の朝、比叡山、岩本氏の綱すき、田中氏の樂器、バケツと茶瓶、外に二三の見るべきもの有之候へども概して平凡の作多數に見受け申候、又大下氏の作品は出品數の割に傑作少く、一方ならず落膽せしめ申候、

要するに今次の展覽會は、其作品(塾生諸氏の)に於て多くの傑作を見る能はざりしも、此開會に依て、一般洋畫趣味に乏しき我大坂人士に其趣味を注入し得たる事蓋し尠少ならざるべしと確信致候。

終に望み、斯道の爲め、主催者及出品者諸氏の健在を祈る。

汀鷗曰く、大坂の洋畫會出品畫に對して御失望を與へし罪を謝す、元より傑作などありやうはなけれど、實は當時關係してゐた展覽會は、長野共進會の分、山形縣師範學校の紀念展覽會、静岡縣榛原中學校、越後高田の中學校、東京のみどり洋畫會、日本銀行内有志の小集會、それに文部省を合せて實に七ヶ所、其他個人に貸與せしもの十數名、それ等の分の手許に戻らぬため、大阪へは持古しのスケッチや畫き損ひの無責任なものばかり往つた次第で、何共御氣の毒千萬、第三回の時は立派なものを御覽に入れますから、今度は御勘辨を願ひます。

日本水彩畫會新會友

横濱市太田町二二三二

茨城縣下館町

白田四郎

和知忠恒



■本號口繪、一番上にあるは、沼田町より見たる赤城山の夕景、次は、沼山峠の下尾瀬湖畔より見たる燧ヶ岳、タテ繪は、追貝の溪谷にして、下を流るゝは片品川、其傍の横繪は、尾瀬湖北岸堂小屋附近、最下の一圖は尾瀬ヶ原に候

■コマ繪第一は、歩行かぬうちから足に豆をこしらへた人、第二は、金精峠で悲鳴を上げた人、第三は、尾瀬ヶ原行に屢々深泥に墜落した人、第四は、繪にある通り日光劍ヶ峯で這つた人、第五は、一行を尾瀬沼へ導いた馬方に御座候。

■本號は郵送料金貳錢を要し候間御注意ありたく候

近 事

△日本水彩畫會十月例會は二十五日開會、午前は大下氏の水彩畫材料についての注意といへる講話あり、午後より、出品畫に對して河合、石井、大下諸氏の批評あり、水彩畫に對する互選の結果、一等赤城泰舒氏、

二等相田寅彦氏、佐藤武造氏にして、デッサンは、夜の部岡田武彦氏一等に選拔せられ何れも賞品を頒たれ、それより茶話會にうつり、二三の餘興ありて五時頃散會したり。

△松原氏主催洋畫展覽會は、前號に本月とせしが前月の誤植なり。

て専ら本邦古美術に就て論議せらるゝ項目多し關西に於ける唯一の美術新報として健全なる發展を望む(月一回一部六錢、奈良市登大路町、やまと美術社)

△織田東禹氏は、約三ヶ月間東北地方漫遊中の作品百餘點を、本月二三兩日數寄屋橋東京地學協會樓上に陳列して公衆の展覽に供せられたり、陳列中の水彩畫は何れもスケッチのみなれど、よく其地方色も現はれて面白きもの多かりし。

紹 介

◎ラファエル商會製水彩繪具各種

京都二條寺町森親子商會

ロンドンなる同商會の發賣品にして、美術家用と特に記入しあり、何れもチューブ入にして、量はニュートン製と異ならず、代價も殆ど同様なるが、品質は稍々優れるが如し、最も變色するや否は時日の問題なれば、こゝには證明しがたし。

◎やまと美術 四六四倍八頁の小雜誌にし

問に答ふ

■普通スケッチに最も必要な繪具名を知りたし(樋口敏子)◎チャイニスホワイト、ガンボーヂ、エローオークル、ヴァーミリオン、クリムゾンレーキ、ライトレッド、バアントシーナ、インデゴ、コバルト、等は缺くべからず此他にレモンエロー、オリイヴグリーン、エメラルドグリーン、ウルトラマリン、ブラオンマダー、セピア等あらは充分■一 寫生の時畫架の代りに膝の上にて用ふる二枚折の如きものは何か二 小笠原紀行は終りしか(佐藤周子)◎一 意味不明、或は畫囊を指すにや二 まだ終らず、序に其他二三の間は答へかれます■投稿の繪畫の大ひさを問ふ(近藤)◎中繪としては凡そハガキ大、最も繪がよければ大きくともとる、寫真版用は繪の小を問はず

『みづゑ』特別讀者を募る

美術雑誌の經營困難なるは、挿入すべき繪畫に多大の費用を要するに拘はらず、讀者の範圍の極めて狭きことなり、夫が爲め偶々雑誌の發行を企つる人も、收支相償はず忽ちにして廢刊の運命に到達するもの比々皆然らざるはなし。然るに吾等が務、編輯、發送の末に至る迄皆一家内にて處理しゆくを以て、經濟の方面に於ても大なる痛苦を覺えず、これ皆寄稿家及讀者諸君の深厚なる同情の賜と、吾等同人の常に感謝する處なり。然れども、これたゞ現狀を維持するといふのみにて、吾等の理想に遠く、吾等が諸君に傳へんと欲する有益なる論語、趣味ある記事、讀者諸君の面白き寄稿も毎月その大部分を剩し、諸君の清覽に供したき諸名家の水彩畫も又妙なからず、それ等の一片たりとも、より多く掲載せんには紙面の擴張を圖らざるべからず、然るに吾等の實はその不足を補ふべき連月の出費に耐えず、定價を改むるは多數の讀者と共に吾等の欲せざる處なり、依て同人協議の結果、特別讀者を募つて漸次『みづゑ』の發展を試みんとす、幸に賛成者十人を得れば二三の紙數を増し得べく、二十人を得れば更に一葉の繪畫を添ふることを得べし、これによつて吾等に幾分の繁忙を加ふるが如きは敢て辭する處にあらず、たゞ大方讀者に多少にてもふき雑誌を提供し得れば吾等の望足れり、希くは眞に水彩畫の趣味を愛し吾等の微意を知るの士は、速に賛同の意を表せられんことを 敬具

規

定

- 一 特別讀者は一ヶ年を一期とし、誌代一ヶ月金壹圓以上を拂込むものとす
- 一 但一時に數月分を拂込むも差支なし
- 一 特別讀者には毎月雑誌『みづゑ』一部を配布し、尙一期毎に水彩畫一點を頒つべし
- 一 但前記水彩畫の筆者は春鳥會幹部河合新藏、大橋正堯、丸山晚霞、眞野紀太郎、大下藤次郎諸氏にして筆者及圖柄共出來得る限り諸者の希望に應ずべし
- 一 配布すべき水彩畫には適當なる額縁を附すべし
- 一 中途拂込を怠りたる時は普通讀者と見做し、其拂込金額を振替へ單に雑誌のみを發送すべく、現金返戻の需に應ぜず
- 一 特別讀者は日本水彩畫會々友と同資格を有し自己作品の批評を受くるとを得べく、猶展覽會の自由觀覽其他の便宜を計るべし
- 一 特別讀者申込書には毎月拂込むべき金額及所望の水彩畫筆者及圖柄を明記さるべし

以上

東京市小石川區關口駒井町

春

鳥

會

振替貯金口座

六九六參番

●本號に限り郵税金貳錢●

(後付の二)

●日本水彩畫會研究所は新築敎場に於て毎日午前、夜、毎週日曜日終日授業すべし

研究所は小石川小日向水道端町二丁目十六番地
(服部坂下通り、電車江戸川線水道町停留場より一丁)にあり

●日本水彩畫會研究所安中支部は群馬縣安中町根岸方にて毎月一回授業すべし、講師は河合新藏、丸山晚霞兩氏にして専ら戸外寫生をなす

●日本水彩畫會研究所横濱支部は神奈川縣程ヶ谷小學校内にあり、授業は毎月第一第三日曜日にして講師は大下藤次郎氏なり、講話及戸外寫生をなす

●日本水彩畫會研究所には地方講習生の設あり、丸山晚霞氏主として通信授業をなす

本誌規定

發行日 毎月一回 三日

定價

一冊送料共金拾八錢、三冊金五十二錢、六冊金一圓、十冊金一圓六十錢、見本一冊郵券にて金拾錢但號數の指定に應ぜず

會友

一時に金拾五圓以上を拂込むものには本會々友として日本水彩畫會々友と同一の待遇を與へ本誌の無料配布を受くる事を得

送金

前金のほか一切送本せず○前金切の時は包紙に注意すべし○代金拂込は振替貯金を望む但一回毎に必ず登記料金二錢を拂込金に加ふべし○本會振替貯金口座番號六九六三番○郵便爲替拂渡局は必ず東京小石川小日向水道町郵便局○郵券代用は必ず一割増

注意

代金の受取證を要するものは返信料を送れ○住所姓名を明記されたい○注文の際は第何號よりと明記されたい

廣告料

御照會を請ふ○切前月十日

明治三十八年六月二十九日內務省許可
明治四十一年十一月十五日印刷
明治四十一年十一月十八日臨時發行

(第四十四)

編輯兼發行人 大下藤次郎
東京市小石川區關口駒井町三番地

印刷者 藤本兼吉
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地



印刷所 株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

發行所 春鳥會
東京市小石川區關口駒井町三番地



K. Suda.